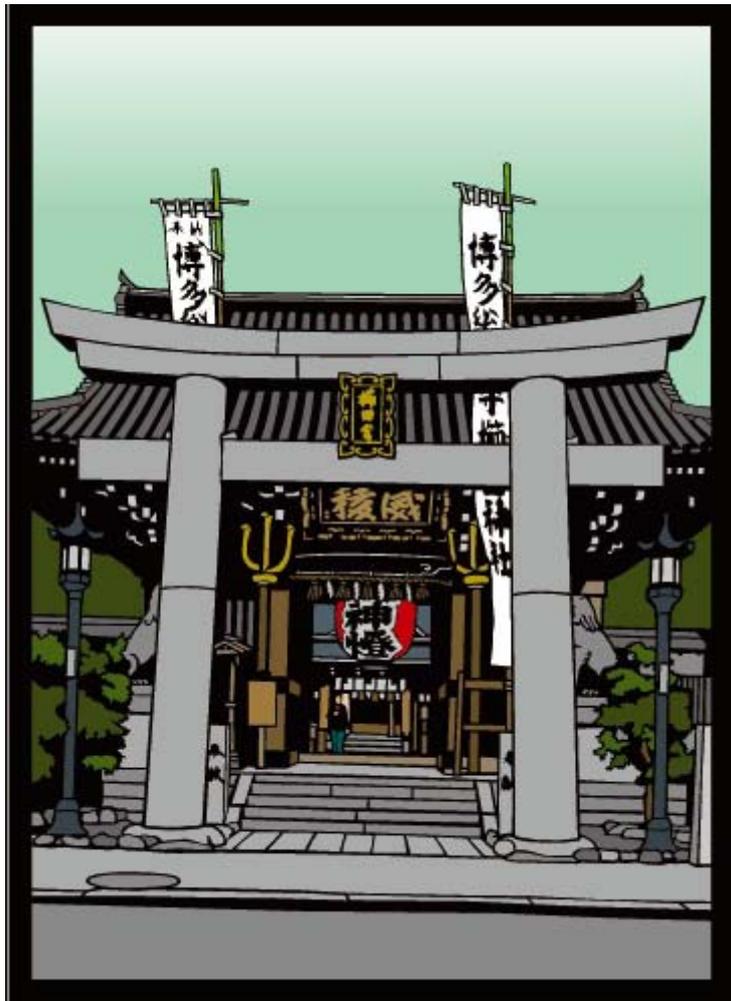


響 風

Hibiki Winds



出展：小西一珠喜（かずよし） きり絵作品より

あしや句会

第 9 号

はじめに

平成二十六年四月二日 義父が肺炎のため死亡した。義父は、平成九年義母が急逝した直後から七年間我が家で暮らした。その後自宅のある宇佐市のケアハウスに入居し、そこで俳句講座を受講した。未経験の句作は新鮮だったようで、ケアハウスを訪れると、部屋の壁に大きな短冊がピンで飾られていた。季語ばかりの句になるといふので、「季寄せ」を渡すと、虫めがねを持ちながら熱心に読んでいた。一年も経つと、大分合同新聞の俳句欄に載ったと言う。またしばらくすると、大分県知事賞の賞状と自分の句が書かれた色紙が贈られてきたと言う。俳句講座の講師は「ホトトギス」に長年投句している女性らしく、教室の雰囲気も良く、皆で俳句を楽しんでいるようだった。新聞や俳句大会には講師によつて投句され、県知事賞の知らせも突然届いたと言う。葬儀の日、賞を頂いた「妻の忌にまた風花のふつて来し」の色紙を棺に納めた。義母の命日は七月三十日なので、風花が降ることは有り得ないのだが、月命日に欠かさず墓前に花を供えていた。この句から、元気に義母の十七回忌を終えるまで墓参りした義父の姿が浮かぶ。

私が最初に俳句で心を動かされたのは、岩本桂子さんの句集「月の」の句の中に家族の歴史が詠まれていたことだ。若い母親の句に子供達(千種さん姉弟)のことが詠まれている。句集に目を通した時、たつぷりの愛情を感じたのではないだろうか。子供達の知らない親の世界を垣間見て嬉しかったのではないだろうか。句集の一句一句を見ながら桂子さんの力量と、わずか十七文字で表現する俳句の力を感じた。自分自身もそのようにしたいが、如何せん力量不足。それでも自分、家族、身の回りの句、吟行句などを作り続けることによつて、私という人間の存在を家族に残せるのではないかと思う。

平成二十五年を振り返ると、還暦記念の榎田神社の豆撒き、その様子を貝寄風会で披露した

大津吟行、野田夫婦参加の船小屋温泉一泊吟行など楽しい時を過ごした。坊城俊樹先生との太宰府・筑後吟行句会、英先生や夏潮九州組との荒尾吟行句会なども貴重な思い出である。今は孫育てに忙しくしているが、これは一時のこと。賞を取るような句は出来なくても、仲間と共に楽しく過ごした時間を持っていたことを残したいと思う。

平成二十六年五月

江本 由紀子

響風 第九号 目次

■はじめに

■吟行記

第九十九回	十日恵比須神社	1
第百回	東長寺の護摩焚と櫛田神社の節分会	6
第百一回	仏心寺と今村教会堂	11
第百二回	宮地獄神社	14
第百三回	水前寺公園・江津湖	19
第百四回	夜宮公園・九州工業大学キャンパス	23
第百五回	門司港界限	28
第百六回	若松北海岸	32
第百七回	皿倉山山頂	36
第百八回	船小屋温泉・岩戸山古墳	40
第百九回	到津の森公園	45
第百十回	森鷗外と小倉	50
■自選句		
五十〇～五十一	平成二十三年十二月～二十四年三月	54
五十二～五十三	平成二十四年四月～七月	56
五十四～五十五	平成二十四年八月～十一月	58
■あとがき		

吟
行
記

(第九十九回～第一百回)

第九十九回吟行記

平成二十五年一月十一日(金)

参加者 節子 光子 真理子 由紀子

十日恵比須神社(福岡市東区)



今年最初の吟行は、商人の街博多の十日恵比須神社の「正月大祭」で始まった。毎年のように訪れていると、行かねばならないという気になってくる。今年は十一日の「残りえびす」又は「残り福」とも呼ばれる最終日。一月十一日吉塚駅に十時集合予定だったが、JR鹿兒島線下りの列車の遅れがあり十時三十分集合となる。改札口で合流し、新年の挨拶を交わしながら駅から十日恵比須神社のある東公園へ向う。すでにお参りを済ませて福笹や福引の縁起物を手に帰っている人とすれ違う。

「正月大祭」は、八日「初えびす」、九日「宵えびす」、十日「正大祭」、十一日「残りえびす」と続く。最終日の「残りえびす」の公園には、いつ

もの猿曳きの姿はなく参道の露店も人も少ない。それでも雲ひとつない真つ青な空に福をいただいた気分になる。年末年始からずっと寒く、雪がちらつきそうな日が続いていたので、久しぶりの快晴が嬉しい。

穏やかな日和賜り残り福

由紀子

鳥居まで続く露店や初恵比須

節子

寂しくもあるほどの人残り福

節子

初えびす空すつきりと晴れ渡り

光子

東公園の一番奥にある神社まで歩く。本殿前に並ぶ列も鳥居までと短く、例年のごったがえすほどの参拝客はいず、最後尾の案内板を持つ係員もない。開運御座や博多券番の芸妓たちの徒歩詣りなど華やかな行事は済み、福引が残っているのみで、それも午後〇時までとなっているので、人出が少ないのは当然かもしれない。長い列に並んで待つことなく福引を引く。禰宜の抱える大筒の中に手を入れ、長い棒を引く。こちらには何が書かれているのか見えないが、「あたりー福寄せ」



「大あたりー満福」と威勢のよい声と共に、当たった縁起物が福笹と一緒に手渡される。禰宜の声は発声練習の賜物のような太く張りがあり境内に響き渡る。

並べたる顔福笹に被はれて

真理子

植木市なども巡りて戎笹

真理子

福笹を手に手に笑みをこぼしあひ

節子

福笹の青々として授与されし

光子

福引の当りかっいで大股に

光子

福みくじ十四時までと残り福

由紀子



それぞれに福笹と縁起物を持ち、食事処として予約した「レガロ」に向う。二度ほど行ったホテル内のレストランなので、多分この道と言いながら歩いていくが、ひとつ曲がる場所を間違えたように様子が変わる。初めての通りに戸惑っていると、間口も奥行きもほとんどなく入口に商品を置いただけの小さな店があり、



店内には恵比須神社の縁起物がいくつも飾られている。

吉兆を手にして少し豆を買ひ

光子

福笹を持つ人と又すれ違ふ

節子

結局レストランは小さな豆の店の真裏にあったのだが、皆で福笹を持って見つけたお店が、人の良さそうな老夫婦の商う豆の店で、道に迷って良かったと思える。何でも縁起がよいように思えるのは福笹のお陰かもしれない。食事も新年のメニューで満足。もう一度十日恵比須神社に戻り東公園を歩く。神社内の露店は少しずつ片付けが始まっている。福引が終われば参拝客も来ないだろうから、端の方にある露店は軽トラに



商品など積み込み始めている。

残り福露店商早やたたみかけ

節子

早々と仕舞ふ露店も残り福

由紀子

片付けを急ぐ露店も残り福

光子



公園内の亀山上皇の像を仰ぎ、入口の日蓮の像を仰ぐ。元寇襲来に縁のある二つの像は高々と玄海灘を見据えている。上皇の像の台座の横にしばらく座り、正面の県庁の建物、公園内の広い枯芝、青い空、飛び立つ鳩の群れ、池に浮かぶ鴨などを見ながら句作。

福笹の青々としてちぢれをり

由紀子

晴れ渡る空に鳩翔つ初戎

由紀子

何がしの上皇の像寒の晴

由紀子

戎笹忘れて歩きをりたる葉

光子

福笹の吾に道きく人ありて

光子

日蓮と向ひ合ふ我も冬の日に

節子

日蓮の像高々と初御空

真理子

父子われ等十日戎に迷ひもし

真理子

公園を出て吉塚駅まで歩き、電車で博多駅に向う。二〇一一年三月の九州新幹線全面開通に伴いリニューアルした博多駅は、阪急百貨店、アミュープラザ、東急ハンズが入店し、「博多シティ」として以前にも増して多くの人が集まっている。ここの魅力は色々あるが、阪急側博多駅三階の「えきなか」にある全面ガラスの広い休憩所もその一つ。そこからは電車の発着が見え、電車好きの子供用に小さな椅子が並べられ





ている。大人用には丸テーブルと椅子がゆつたりした間隔で置かれているので、横の売店の珈琲や紅茶を飲みながら休憩できる。そのまま改札口にできることなく電車に乗り換えることもできるのも利点で、博多駅の穴場ような休憩所である。ここで十句の句会。十六時三十分すぎ解散。

後日、NHKの「鶴瓶の家族に乾杯」という番組に福岡市と北九州市の中間にある宗像市が取り上げられ、宗像大にも紹介され、この地の良さが出ていて嬉しかったが、もう一つ印象の深いものが映っていた。

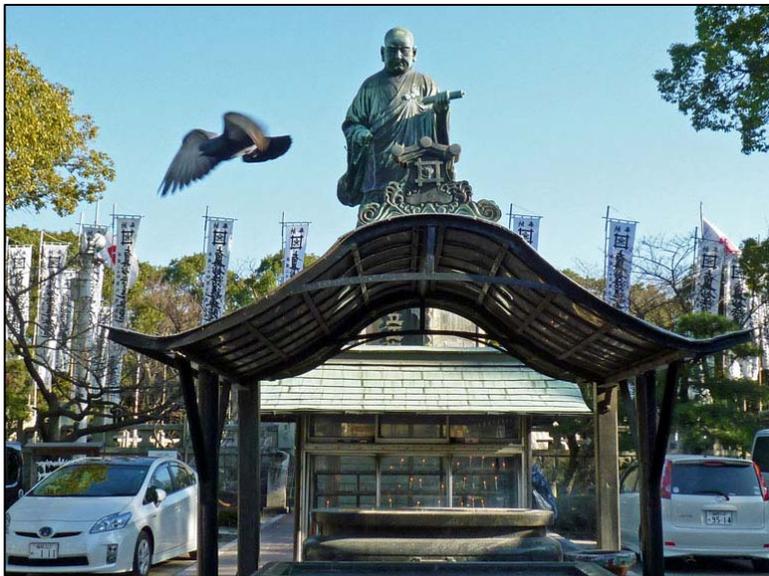
鶴瓶さんと女優さんと話した島の漁師さんが、収録後に家族揃って「鶴瓶さん、また来てねー」というシーンの座敷の床の間に、十日恵比須神社の福笹と縁起物がずらりと飾っていたのを見た時、恵比須神は福神であり、商売繁盛の神であり、古くからは海の神であることを再認識させられた。よき年でありますように！！



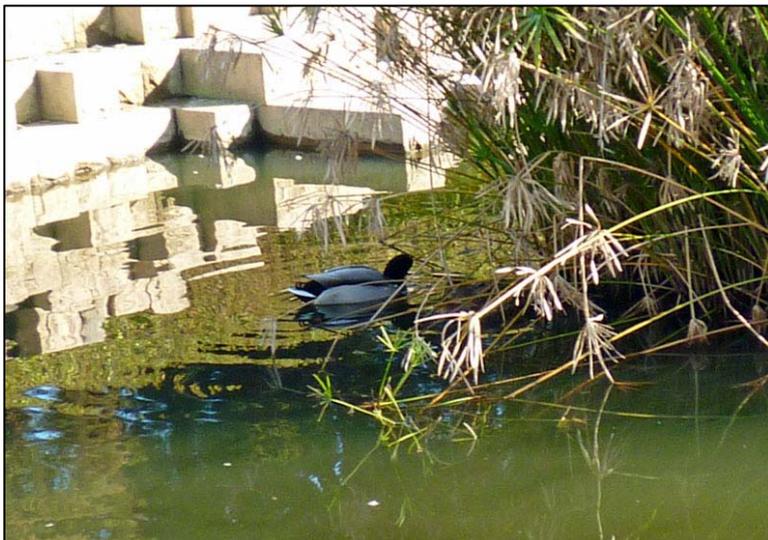
【レストラン「公孫樹の木」の庭園】



【福岡県庁と露店】



【日蓮上人像と東公園内風景】



第百回吟行記

平成二十五年二月三日（日）

参加者 勝利 佳与子 節子 光子 真理子 由紀子

東長寺の護摩焚と榊田神社の節分会（福岡市博多区）

毎年恒例のように行くようになった東長寺の護摩焚と榊田神社の節分会に、今年は吟行として行くことに決まった。節分会に行く前には、ネットでは今年ほどの役者さんが何時に豆撒きをするのか等調べて、混雑するのを避けるようにしている。榊田神社の狭い境内に、博多座に出演中の役者さんが投げる福豆目当てに大混雑するからだ。



いつものようにネットで調べていると、年男、年女の豆撒きが当日申し込みでも出来ると書いている。特に条件はない。福岡市在住でなくてもいいの、氏子でなくていいの、半信半疑で榊田神社に電話すると、いとも簡単に「年男」「年女」であれば出来るという。北九州在住ですと念を押したが、問題ないという。今年は巳年。ただの年女ではない。還暦である。次の年女になるのは七十二歳と思うと、これを逃すべきでない！あの山笠の神社の舞台で、自分が節分豆を撒くことなど思ってもいないことである。皆どの吟行句会なので、出来るだけ迷惑かけないようにと午後二時に鳥居の



前に集合し、近くの喫茶店で句会をすることのみ決め、後は自由行動とメルする。有難いことに、皆豆撒きの時間が判れば様子を見てくれると言

う。
当日十時前に社務所に到着。それぞれにメールが届き、榊田神社の一回目の豆撒きを見る人、東長寺の護摩焚に行っている人など、取りあえず皆の居場所を把握。十時開始の一回目の豆撒きは、地域の有力者、二回目は歌舞伎役者なので、一般の人は十一時以降となり、申込み順だという。時間指定はできない。さてどうするか・・・考えているうちに今年の豆撒きの役者、中村勘九郎、七乃助兄弟が神社に到着するらしく、警備の人や博多座の法被を着た関係者がマイクを持ち、社務所前にロープを張り始める。名役者勘三郎亡き後「時の人」になった兄弟だけに、これはここで待たねばと生来の野次馬根性が出て、ロープすれすれに到着を待つ。ようやく着いたハイヤーの後部座席のスモークガラスに朝日が反射して良く見えな

い。さっと社務所に入って行く後ろ姿を見送り、出番を待つ。だが境内は彼ら目当てのファンも多く、身動きが出来ないほどの混雑ぶり。見るのは諦めて祈願とお参りを先に済ませようと思ったが、晴天の日曜日とあって

長い列をなしている。家族の祈願証を書いてもらい福引を引く。

掛声のとぶ六代目豆を撒く

光子

豆撒きし歌舞伎役者を待つハイヤー

由紀子

勘九郎さんたちの豆撒きが終わったらしく、歓声が一段落し人が動き出している。ということは勘九郎さんたちは待たせているハイヤーで帰るということなので、またもや社務所前のロープの前に陣取る。見物客のまばらの中ハイヤーが動き出しぴったり自分の目の前に止まる。節分会に来たというより、全く歌舞伎役者の追っかけ。来ました、来ました。テレビと全く変わらぬ二人が目の前のハイヤーに乗り込んでいく。一人の七十代とおぼしき女性が握手を求めてロープをすり抜け追っかける。これぞ追っかけ。印象的だったのが勘九郎さんのファンへの丁寧な接し方。ここでもファンを増やしたようだ。

豆をまく役者が退けば人も又

佳与子

撒き終わる豆に人波入れ替はり

佳与子

この時点で豆撒きを申し込むと、十二時か十二時半に撒くことになりそうなので、皆の集まっている東長寺の護摩焚に向う。いつものように東長寺の境内は人で混雑し、被り物の七福神が舞台に上がっている。十一時の護摩焚きはすでに始まっており、本堂の上がり口近くに座る。



護摩堂にほら貝ひびく節分会

節子

護摩堂に炎上がりて厄落

節子

もうもうと煙る護摩堂春浅し

節子

護摩堂の中に咳く経文も

節子

ほら貝の音に始まる節分会

節子

春塵の六角堂に人待ちて

真理子

経文で厄を落としてもらい、護摩堂を出て皆と会う。デジカメを光子さんに渡し、撒く姿を写してもらおう約束をしてまず一安心。境内の舞台からの豆撒きの豆を一個拾ったが、もう心ここにあらずで、昼食の皆と別れて榎田神社に戻る。十二時三十分過ぎ受付を済まし、すぐに社務所内に入る。撒く時間が十三時三十分だと確認して昼食中の皆にメールする。あとは撒くだけなので、係りの人の指示に従い、靴と荷物を預け着付けの部屋に入る。三人の年配女性が手馴れた様子で次々と



部屋へ移動しご祈祷を受ける。自分の住所と名前がちゃんと呼ばれる。妙な心持で、いよいよ社務所より舞台へ向う。途中枡を手渡され紅白のボールを入れる。一列になって進むが、ちょうど真ん中当りにいるので、舞台でも真ん中あたりになりそうだと気持ちよく列に従っていく。

袴と袴を着付けていく。赤い手ぬぐいを渡されて出上来がり。一人二〜三分位だろうか。素早い。袴姿で二階の廊下の長椅子で前の組の人達の終わるのを待つ。三十分間隔で撒くので流れ作業のように人が動く。接待室の戸が開き、同じ時刻に撒く人が一同に座り、和服の日本女性から大盃でお神酒をいただき、和服の外国人男性からお抹茶と和菓子をいただく。そして箆にはいった紅白のボールとマジックを渡され、好きな言葉を書く。自分がもらって嬉しくなる節分にふさわしい言葉をと注文が入る。それが終わると、紅白のボールを手にしたまま隣の

袴をつけて女や節分会

由紀子

袴をつけて福豆出番待つ

由紀子

還暦の豆撒く友に馳せ参じ

光子

舞台が見えてきて、次々に紹介されている。やがて自分の名前も呼ばれるのだらう・・・とか、佳与子さん達は間に合ったかしらなど思いながら舞台の正面に立つと、人・人・人に圧倒される。皆のにこやかな顔が迫っ



て来る。ぐるりと見渡せば・・・勝利さん、光子さんカメラを持っている。節子さん、佳与子さん、真理子さんが手を振ってくれる。嬉しくなって小さくVサイン。自分の名前が呼ばれたのに記憶が全くないのは、すっかり舞い上がっていたのだろう。枡の紅白のボールを持ち、まずポーズ。そしていよいよ撒き始め。ボールを投げた後は次々に後ろから福豆や餅が飴の入った枡を渡される。節子さん真理子さんらのいる辺りや真下で手を差し伸べている人、後方にいる人に撒いてみる。力いっぱい後ろに投げてみるが、思ったほど飛ばない。見ている人には「艶つけて投げよっちゃん」みたいだったらしいが、本人はいたって一所懸命。舞台上に用意されていた福豆の枡が全部空になったところで終了。中央にいた五十代の男性が指名され「祝いめでた」を三番まで唄い、博多一本で舞台を降りる。

追儺会の舞台に迫る人出かな

由紀子

舞台より我還暦の豆を撒く

由紀子

豆をまく女に彼女帽子振る

佳与子

袴の彼女神妙豆をまく

佳与子

なやらひの太鼓連打や子は眠り

佳与子

我もこの善女の一人豆を撒く

節子

社務所に戻り、すばやく袴や袴を返して一袋のお土産を手に皆のいる境内に急ぐ。袋の中には櫛田神社の御札、お神酒福搔、福豆など縁起物が沢山入っており、皆の手には拾った福豆がたんまりとあった。勝利さんはカメラマンに徹して貴重な豆撒きシーンを写してくださいと、光子さんは豆を撒く前のシーンを写して下さった。有難うございます。

豆まきの二社を巡れば日暮れかな

佳与子

句会は櫛田時神社から中洲川端商店街を抜けて、博多レバレインのホテルオークラ一階の喫茶室にて七句出句。その後オークラ前解散。



【櫛田神社・節分会】



【東長寺・護摩焚】



【榎田神社周辺】

第百一回吟行記

平成二十五年三月六日(水)

参加者 勝利 光子 由紀子

仏心寺と今村教会堂
(太宰府市・太刀洗町)



坊城俊樹主宰の九州花鳥会の句会が初めて開催された。前日の五日に九州入りをされマイクロバスで太宰府周辺を吟行されるということで、同行させてもらう。予定地の都府楼址、天満宮、観世音寺は何度か吟行しているが、都府楼址の横の花鳥山仏心寺は初めてであった。この寺の住職河野静雲はホトトギスの同人。昭和二十四年に建立され、虚子を祀る「虚子堂」があり、多くの句碑がある。また寺の山裾にある「帯塚」は、虚子が擦り切れるまで愛用した「博多帯」を静雲に託し、仏心寺のそばに埋めて欲しいと願ったことにより建てられたものである。

天の川の下に天智天皇と臣虚子と 虚子(政庁前朱雀大通り)

帯塚は刻山裾に明け易き 虚子(仏心寺)

冬耕の水城といえる野を急ぐ 年尾(仏心寺)

虚子堂となづけしことよ萩芒 立子(仏心寺)

刻惜み刻山裾の椎拾ふ 晴子(仏心寺)

あた、かき旅の出逢いとなりしこと 汀子(仏心寺)

あかつきの清気真白の酔芙蓉 静雲(仏心寺)

翌日の六日午前七時に久留米のホテルを出発し、遠くに耳納連山が霞む長閑な景色を眺めながら、マイクロバスは太刀洗の教会堂に到着。久留米から二十〜三十分くらいかかっただろうか。天主堂は煉瓦造りの立派なもので、目を見張るほどであった。長崎や平戸などの教会が観光地としても有名だが、福岡県にこのような教会堂があるとは知らなかった。復活祭前の四旬節の祈りの期間で、九時のミサに信者の方々が集まるので、その前に堂内を見させてもらう。同行の「花鳥」の編集委





員の栗林氏の力添えが大きく、関係者の丁寧なもてなしや説明に感銘を受ける。

この辺りのキリスト教信仰は戦国時代にさかのぼるとされ、禁教令以後も隠れキリシタンとして信仰を続けていたらしい。幕末、長崎大浦天主堂の神父が、隠れキリシタンの発見と正統な信仰への復帰に努め、一八六七年（慶応三年）今村のキリシタンたちが発見される。（今村に百戸、周辺に百戸）平野部でのキリシタン発見は極めて稀らしい。現在の今村教会堂は、明治四十五年着工、大正二年（一九一三年）に竣工されたものである。

教会に集まってくる信者たちの中には、農作業を終えてくる人もいるのか、軍手はずして十字を切り、白いベールを被って祈りを始めている。邪魔をしないように教会堂を後にする。

祭壇の絵ガラス映る春の闇

勝利

お陰様で春めいて来ました寿庵様

勝利

教会の双塔見ゆる雲雀野に

光子

近くの田畑を歩いて行くとお墓が見える。田んぼの広がる中にかたまって建っている。崩れているものもある。土に帰るように倒れている墓石の回りには土筆がたくさん生えているので、足元に気を付けながら見て回る。日本式の墓石の上に石の十字架のある墓を見るのは初めてで、この辺りの集落が隠れキリシタンの里だと実感する。雲雀が鳴き、鶯が鳴く空は、霞がかかつてはいるが、とても穏やかな風が吹いている。



耶穌の墓土筆踏まずに入りなむ

勝利

教会の空にまぎれのない初音

由紀子

蛇穴を出でて筑後に耶穌の里

由紀子



久留米に戻り、句会場になっている石橋文化センターの広い庭園を吟行。久留米出身の青木繁や坂本繁二郎などの絵など見応えのある絵が多く

展示している石橋美術館にも入館する。句会場では、マイクロバス同行者以外の参加者も多く、盛会のうちに句会を終える。

耶穌墓の倒れしところ土筆生ふ

由紀子

揚雲雀ゆく手に昼の月かかり

光子

麦青む畦を自転車通学生

光子

春光や湧き出づるもの描かれし絵

光子

荊棘の名の違えば育つ芽も違ひ

勝利



あたたかき旅の出逢いとなりしこと
汀子



虚子堂と名づけしことよ萩芒 五子

【仏心寺・句碑】

第百二回吟行記

平成二十五年四月十二日(金)

参加者 勝利 佳与子 節子 光子 真理子 由紀子

宮地獄神社 (福津市)

桜も散り、そろそろ牡丹の咲く時期なので、久々に宮地獄に行くことになった。あの雨の中での節分会以来である。四季折々に花を楽しめる神社なのに、何故か遠のいていた。

四月十二日十時三十分福岡駅集合。タクシーに乗り吟行地「宮地獄神社」へ向い、車で来た野田夫婦と本殿脇の駐車場で合流する。本殿は、新緑の山を背に大注連縄を際立たせて鎮まりかえっている。

境内の緋寒桜は若葉の枝を伸ばして、こんもりと盛り上がり、楠の若葉大樹が風に光っている。参拝客はほとんど居ない。風吹く境内に驚の美しい



鳴き声がよく響く。参拝を済ませ、本殿裏の八重桜の並木道を抜けて牡丹園へと下りて行く。まだ牡丹の苔のほうが多いが、色どり豊かな大輪の花が咲いている。しばらくベンチに座って眺めていると、親子やご夫婦らしき幾組かが、牡丹を眺めては去っていく。

鶯に大注連縄の社かな

由紀子

紅帯びしかなめ若葉や巫女二人

真理子

牡丹園の斜面に、枝が皆上向きの箒のような樹形の木が美しい花をつけている。桃のような淡いピンク、濃いピンクの花は満開で、若葉の森の小道をさらに明るくしている。後で調べると樹形のとおり「ほうき桃」というらしい。約四十本植えられている。斜面を下りると菖蒲池が広がっている。シーズンになると賑わうが、まだやわらかい新芽がでている程度。池の木道までは下りないが、池に沿う道を奥へ奥へと進んで行く。

歩いていると、どこからか花びらがひらりひらりと舞ってくる。その中に蝶が紛れている。すかさず皆句帳に書き込む。静かな景色に少しでも動きがあると良い句材になる。



飛びながら落ちゆく蝶に風強く

節子

初蝶の行方見送る四人の目

佳与子

花びらに紛れて小さき蝶飛んで

光子

強東風に抗ふ蝶の行方かな

由紀子

白き蝶はらりと落ちて飛びもせず

勝利



奥まったところの葦葺きの建物に入ってみる。ここには日本各地から移築復元した古民家があり、「納屋造り」と「くど造り」など案内板に書かれている。昔の農家の生活の様子がわかるようににはしているが、置きっぱな

して手入れをした様子はない。古民家の横と裏には、山羊、馬、ポニーなどが柵の中に放され、動物たちはじっとして気だるい目をしている。

神苑の馬に馴れもし日永かな

真理子

ひもすがら長閑なるかな親子馬

真理子

首振りて厩出し馬ののどかなる

真理子

なでてみる馬の鼻筋牧のどか

佳与子

眠さうにポニーの親子八重桜

由紀子

案内板には「宮ZOO」の文字。動物園にしては動物が少なすぎるが、昔の農家が飼っていた動物を放しているようだ。ここに放し飼いの鶏が鳴けば、まさに田舎の風景。菖蒲池の向こう側の合掌造りの民家も高床式小屋も移築したもので、初めてこの風景を見たときは、何故神社の敷地に飛騨の合掌造りの民家があるのか不思議だったが、参拝する多くの人が、日本の原風景のような景色を目の当たりにして、心の豊かさを持ち帰ってほしいとの願いからではないだろうか。豊かな自然を活かした境内である。ただ、移築した古民家はどれも手入れがなされていなく、崩れそうな一角もあるのが残念である。

古民家の天井高し春の風

佳与子

潰えたる家は薫屋根花楓

真理子

十二時三十分本殿に戻り、大鳥居の下の参道の「官地館」にて昼食。あの節分会の時には震える体をストーブで暖め、松ヶ枝餅を食べたあの店と思うが、リニューアルされた店内に驚く。官地獄に来た時に利用していた「大力」と連絡がつかなかったため仕方なく電話で予約はしたものの、全く期待をしていなかった。土産物の店の奥の垢抜けたテーブル席に目を疑った。料理もとても安くて美味しい。手作り豆腐が持ち帰りできるので購入。

昼食後、また石段を上り境内を散策。「この先に硝子工房があるはず」という真理子さんに従って、契池の南側方面に歩いて行く。この辺りは初めてで、竹林には今年竹が伸び、ムラサキケマンの花や名もなき草木の花



があちこちに見られる。鶯もさらのびのびと声を響かせている。作業車の通れる道沿いに硝子工芸の店と工房があり、中を見学させてもらう。店内にはアクセサリーから干支の蛇の置物など魅力的なものが置かれている。

午後になり風の消えたる花茨

光子

うぐひすのその木にゐるとわかるのに

光子

鶯や息切れしそうにも鳴いて

佳与子

目に留まる度につぶやき華髪草

真理子



緋牡丹や溶かす硝子の火にも似て

由紀子

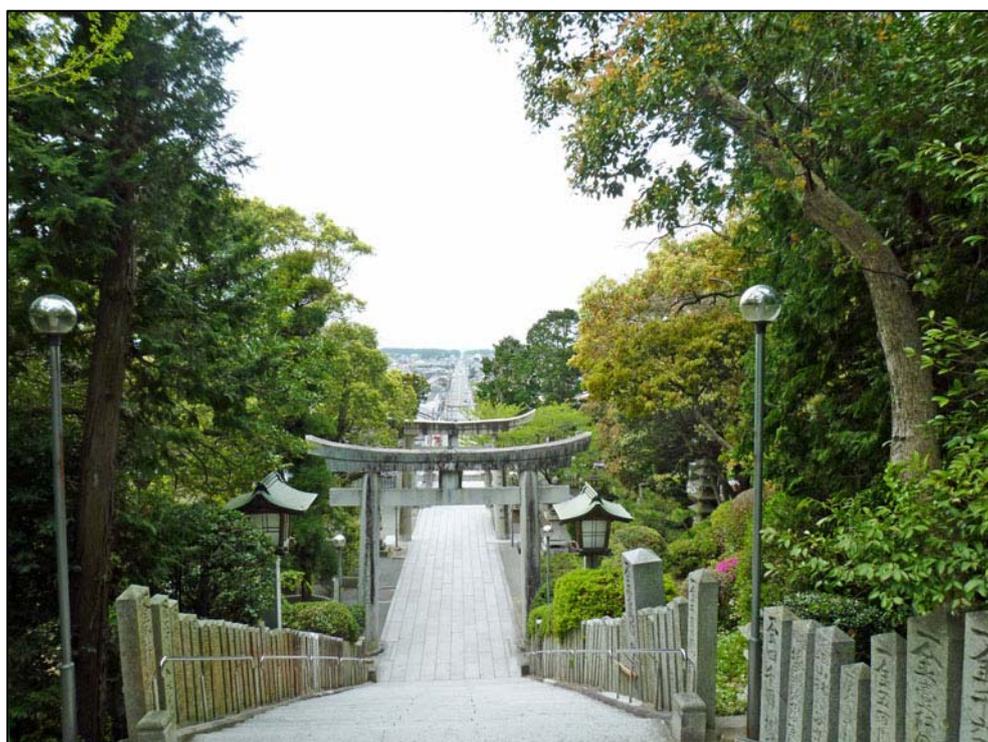
参道は餅屋ばかりや若楓

由紀子

春潮の果てまで参道なりしこと

真理子

参道の土産店内で句会。中庭の見える畳敷きのテーブルで、焼きたての松ヶ枝餅とお茶で一服しながら作句、十句の句会。ほかに客もいないので、すっかりくつろぐことができた。広い境内を持つ宮地獄神社の半分をあるいたのみの吟行だったが、花や鳥や食事に満足し、句材も多く充実した吟行句会となった。海までまっすぐ伸びる長い参道を眺め、神社をあとにする。



【宮地獄神社参道】



【宮地獄神社境内・古民家・遠景】

第百三回吟行記

平成二十五年五月十六日（木）

水前寺公園・江津湖（熊本市）

昇先生を囲んでの貝寄風吟行句会が、五月十七〜十九日大津で開催された。九州貝寄風のメンバーは、予定の入っていた勝利さん以外皆大津に駆けつけた。八十五歳になられた先生のお元氣な姿に安堵し、先生と治療中ながらも元氣になられた佳与子さんとの再会を喜び合い、そしていつものがらの行き届いた関東貝寄風のお世話に、どっぶり甘えた吟行句会を楽しんだ。五月は、ゴールデンウィークに加え、この大津吟行があったので、九州貝寄風のみ月例会は「お休み」。そこで今月の吟行記は、私事で行った熊本の半日を書くことにした。



五月十六日、博多から九州新幹線「つばめ」に乗り込む。二〇〇一年三月十二日に開通した九州新幹線は、大変な開業イベントだったと思うが、開業前から車輛のデザイン、広さは評判になっていた。この新幹線に乗ることも楽しみにしていた。新大阪と鹿児島間を走行する「みずほ」「さくら」と「つばめ」が走行しているが、「つばめ」は博多発の熊本までの各駅停車。それ故に期間限定の大幅な割引切符があった。名前も「ビックリつばめ」切符。特急で乗り継いで行くより安い。車内は左右二人、二人のゆったりした椅子、背もたれやドアなどに木材が使われ、車窓のブラインドは「すだれ」のような木材仕様で、全体的に温かみがあり、評判に違わない。所要時間の五十分はあつという間に過ぎた。

この日の目的は、市内で開催される「糖尿病学会」に出席の娘の空き時間に付き合うこと。四〜五時間の為わざわざ熊本までとは思ったが、以前より俳人・中村汀女が近くに住んでいたという江津湖を訪れたいと思っていたので、この機会に行ってみようと思いついた。

この日の熊本駅は「学会」関係者らしき人が多く、車も混んでいたが、市電が走っているので乗り込み、まず熊本城を散策。武者返しの城垣、大小二つの天守閣、復元された華麗なる本丸御殿、天守閣からみる広大な城内に圧倒



される。さすがに日本三大名城の一つといわれる城である。遠くに阿蘇の山並みが薄々と見える。

葉桜の城聳えたる武者返し

由紀子

復元の本丸御殿若葉風

由紀子

天守閣からは陽炎ふ阿蘇五岳

由紀子



気温二十六度の初夏の日差しの中を歩くには少し疲れたので、タクシーで水前寺公園まで行く。ここは肥後細川藩初代忠利公が鷹狩の折、こんこんと清水の湧くこの地を気に入り御茶屋として作ったのが始まりとされるところで、その後三代にわたって造園され、東海道五十三次を模したみごとに桃山式池泉回遊庭園となっている。元禄時代には東屋が沢山あり、もっと華やかな庭園だったそうだが、宝暦の改革時に松の木のみの質素なものになったとされている。それでもよく手入れのされた阿蘇の



湧き水の池を中心にした庭園は見事である。園内にある「出水神社」は、明治十一年有志の人達によって、歴代藩主を祀り、西南戦争で荒廃した熊本への復興を願うため建立された神社である。この日は特に行事など無い日だったので、人はまばらである。神社にお参りし、庭園をぐるりと回って江津湖に向う。江津湖は水前寺公園を出て、大通りを挟んだ向かい側に広がっている。川に沿って案内の矢印がある。川底が見えるくらいの流れで、沿うにつれて川幅が広くなっている。水は澄みきり、底の水藻が美しい。市内を流れる白川水系の川である。この辺りは南阿蘇村湧水群として名水百選に選定されている。川沿いの何でもない景色から急に芭蕉の木が目立ち始め、少し行くと芭蕉ばかりの林の中にある。南の国に迷い込ん気分になる。句碑を見つけた。

【縦横に 水のながれや 芭蕉林 虚子】



に静かに咲いている。傍の句碑を見れば汀女の句。この句は横浜の三溪園での句とされているが、汀女の代表句である。

【とどまれば あたりにふゆる 蜻蛉かな 汀女】



や水生植物など見所は多そうだが、芭蕉林と汀女の句碑に満足で、次回こ

この句がここで作句され

たと思うと、芭蕉林の中の水が気になるが、湿地帯のように足下がぬかるむので、道になっている所のみを歩く。さらに先に進むと芭蕉林はなくなり、川から急にひろがった湖が現れ、梅檀の花が所々

江津湖の傍に汀女が住み、

そこに句碑があったといわれる 【つゝじ咲く 母の暮しに 加はりし 汀女】の句碑まで辿りつけない。日は傾き、そろそろ帰る時間に近づきつつある。目の前の湖は「上江津湖」で、その先に「下江津湖」が続いている。野鳥

こに来ることがあれば、下江津湖までゆつくりと歩いてみたいものだ。

浴ひ行けば湖にひろがる青芭蕉 由紀子

湧き水の絶えぬ江津湖の芭蕉林 由紀子

梅檀の花や汀女の湖に佇つ 由紀子

対岸へ渡る橋なく夕薄暑 由紀子

市電で熊本駅まで戻り、小旅行を終える。娘も初めてみる芭蕉林には驚き、俳句吟行とは、こういう風によく歩き、自然を満喫するものだとなり、友人たちと行く旅行とは一味違う観光に満足したようだ。また出かけよう。





【熊本城】



【水前寺公園】



第百四回吟行記

平成二十五年六月十四日（金）

参加者 勝利 佳与子 節子 光子 由紀子

夜宮公園・九州工業大学キャンパス（戸畑区）

毎月の吟行地選びに苦慮している。近場の名所は大方吟行しているので、毎回どこにしようかということになる。祭礼や風物詩となるような行事があれば優先的に行きたいが、吟行日に当るかどうかわからない。そうなるお手っ取り早く季節の花や風景の美しい場所となる。今月は紫陽花か花菖蒲のどちらかで、集合に都合のよい所を考え、花菖蒲の夜宮公園に決まる。

勝利さん・佳与子さんご夫婦が下見をし、花の開花状態や駐車場、昼食、句会場など、計画を立ててくれる。

六月十四日、十時三十分夜宮公園の駐車場で合流予定。八幡駅で節子・由紀子は光子さんの車に乗せてもらい夜宮公園へ向う。だが夜宮公園の駐車場は、最近新しく出来たのか地図やナビに入っただけで、違う所に停めたらしく指定の駐車場に行くのに一苦労。大樹に覆われた広い公園は、丘陵地になっているの



で、入口が違うと場所がわかりにくい。

ようやく合流し、日本庭園のある菖蒲田を巡る。東屋には先客が何人かいる。四〜五日前の土日の「花菖蒲祭り」には、大勢の人が訪れたと思うが、二番手の花芽が開花しはじめた花菖蒲に、人影はまばらである。ボランティアの人が少ないのか、菖蒲田は雑草が伸び放題になっている。蝶が菖蒲や草の陰から、ひらひらと舞い上がっている。

今年の梅雨入りは関東が五月二十九日と早く、九州北部も同じ頃梅雨入りしている。雑草はその影響もあるかもしれない。日本庭園側の紫陽花や夏椿がこじんまりと花をつけ、よく見ると蜻蛉もいる。曇り空が広がっているが、気温二十八度と暑く時折差す日差しは夏である。しばらく吟行する。

花菖蒲池公園の東西に

光子

夏椿一花を杭にのせてあり

光子

夏の蝶黄色が白を追いかけて

節子

突として鳥のやうなる黒揚羽

佳与子



丘陵地を登って、西側にある菖蒲池に向う。公園全体に楠の大多木が多く植えられ、落ち葉が一面に敷かれている。上りきった所には、慰霊塔が立ち、桜の木に囲まれた大きな広場がある。イベントはここで行われる。そ

こを通り抜け、坂を下ると、大きな青い紫陽花と菖蒲池がひろがっている。花菖蒲は、先程の菖蒲田よりこちらの方が種類も広さも見応えがある。回りは木々で覆われ、紫陽花の花とサルビアなどの花文字の花壇の両脇には水が流れ落ち、菖蒲池へと流れこんでいる。池の中では一人の女性が黙々と花殻を採っている。居合わせた女性がカルガモの親子が池にいと教えしてくれる。菖蒲の間に親鳥を見つけ、子供もいるはずと捜すが見当たらない。親鳥はすーっと飛び去り、その辺りに子を探すがいない。探しながら、盛りは過ぎたが、それぞれに名前付けられた美しい花菖蒲を見る。

風ならんかなた揺れある花菖蒲

勝利

萎びたる去年の実もあり柘榴咲く

勝利

夏木蔭定家葛の花巻いて

光子

花菖蒲その名こぞりて教えくれ

光子

サルビアで彩る市制五十年

光子

黙々と花殻を摘む菖蒲池

節子

軽鬼の子を一羽も見つけられぬまま

節子

軽鬼の子を探しながらの池巡り

節子

手入れする女一人や菖蒲畑

佳与子



この菖蒲池に辿り着く前に、公園内の弓道場を覗いてみる。人がいることを期待していなかったのだが、フェンスを隔てた弓道場には、袴姿の男性、女性が弓を射っている。青芝のまぶしい弓道場にピーンを張り詰めた空気が流れ、邪魔にならないように、こちらでも静かに見守る。

青芝の先の的へと弓を射る

佳与子

弦の音低く梅雨の矢放たれり

佳与子

松の芯朝の静寂に矢を放つ

由紀子

放ちたる矢追ふ横顔涼しかり

由紀子

矢を放つ音のみ聞こえ夏木立

光子

引き絞る弓の重さや梅雨に入る

光子

緑蔭に距離九間の弓道場

光子

梅雨晴や射場に矢当る的の音

勝利



「明専会館」にて昼食。窓際の席はいっぱいになっていたが、ここはいつもゆつたりした雰囲気。句作にはもってこいの場所。昼食後、夜宮公園か

ら近い九州工業大学のキャンパスに行くことになった。節子さんが以前住んでいた沢見社宅の横を通り、大学の広いキャンパスの西門から入る。守衛さんに許可とカフェの場所を教えてもらい中に入る。赤松の木立の中に校舎が並んでいる。学食はまだ賑わっている。その先にある新しい建物の1階にあるカフェに入ると、学生が何人か楽しそうに話している。外のテラスにもでられるが、冷房の部屋のほうが良さそうだ。アイスクリームやあん蜜など安くて美味しい。

門衛の眠り束の間合歓の花

節子

学生に交じりカフェの冷房に

節子

十句の句会。外に出ると滴るような緑のキャンパスに工業大学らしい実



験装置などが置かれ、学生たちの話し声が何処からか聞こえ、明るく活気がある。こういう時代もあったなーと思いつつ・・・あれから四十年！！この沢見の社宅にも時々来たけど、それも二十年以上前のこと。まさに光陰矢の如しである。沢見から高見に移動し、皆で夕食替わりの蕎麦を食べ解散。



【夜宮公園】

第百五回吟行記

平成二十五年七月五日（金）

門司港界限（北九州市門司区）

参加者 勝利 佳与子 節子 光子 由紀子



七月五日門司港駅に十時三十分集合予定。野田夫婦は車で十時すぎ到着。節子さんと光子さんは、早目に来て、「九州鉄道記念館」を見学。そして私の乗った十時二十九分の電車が到着して、予定通り門司港駅に参加者全員が集まる。ちょうど開館十周年になる「九州鉄道記念館」は見応えがあったようで、よい吟行になったようだ。

門司港駅は九州の鉄道の起点の駅で、現在もこの駅から博多、熊本經由

の鹿児島終点の鹿児島本線、大分、宮崎經由の鹿児島終点の日豊本線が延びている。九州最初の鉄道会社「九州鉄道本社」が明治二十一年に設立され、門司に本社が置かれる。当時貿易などで栄え、さらに日本の近代化に向けて製鉄所が建設されてから、輸送がさらに重要なものとなり、明治、大正、昭和初期、この界限はモダンな建物が建ち並ぶモダンな街だった。その頃の車輛などが展示されているので、早く着いて見学するのも良かったかなと思う。門司港駅舎は修理中で、あの美しい屋根もシートで覆われている。

梅雨湿り機械油の匂ひして

光子

赤れんが倉庫閉じられ梅雨湿り

節子

ミニ鉄道団扇片手に運転し

節子

皆集合してから、さっそくレトロ口地区に向う。まだ梅雨の明けていない港町には、湿った風と潮風が交じり合い、爽やかとは言えない難しい風が吹いているが、海峡と大橋とレトロな建築は、十分詩情を掻き立てる。門司港ホテルの近くに大小のクルーズ船が停泊している。大きい船はレストランになっていて、小さいピンク色した船が海峡を廻ってくれるらしい。小屋に出航の時間が書かれているが、中に人がいない。十一時出航があ





るので、少し待っていると、青年というか少年といってもよい若者が、小屋の鍵を開け切符を切ってくれる。この時間の乗客は私達のみで船まで案内してもらって乗船する。若者も船に乗り込み、クルーズの所要時間、注意事項などを説明した後、操舵室に入り舵を取り始める。船長はもう少し経験を積んだような中年か、初老の男性と思っていたので、下船後年齢を聞いてみると二十歳だと言う。この年齢で免許は取れるらしい。

跳ね橋の端が頂点雲の峰

勝利

波しぶきよけて汀に日傘さし

佳与子

跳ね橋の上がりし先の雲の峰

光子

停泊の船納涼のサキソフォン

由紀子

切符切る遊船の長二十歳

節子

跳ね橋を通り抜けて海峡に出ると、潮流の速さと船の速さでスピード感があり、船室の窓には波が打ちつける。デッキに皆座って潮風を満喫している。対岸の下関の唐泊までは行かず、海峡の真ん中より門司港辺りをぐるりと廻って、また元の船溜りに戻る。貸切状態で、跳ね橋が上がっても上がらなくても通り抜けできる小型の船ならではの面白さがあり、船から港をみると陸からはみえない景色が見える。



大橋の彼方に馬関船遊び

佳与子

潮風のさらふ夏帽胸に抱き

佳与子

大橋に返す関門船遊び

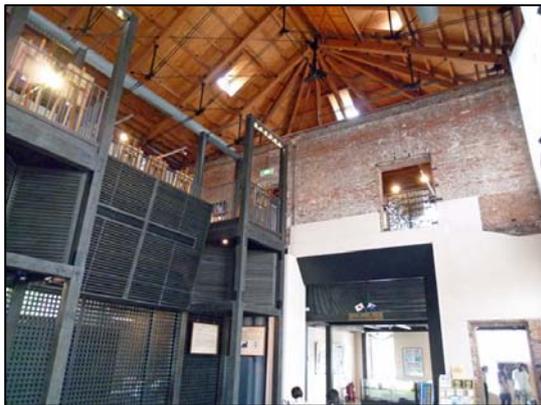
佳与子

跳ね橋をくぐる港湾夏の海

光子

白南風に絶えず砕けて舟の波

光子



早鞆の瀬戸に吹く風雲の峰

光子

皆少し離れて梅雨に座る椅子

光子

早鞆の潮に出でもし船遊

由紀子

南風吹く海峡船の水脈乱れ

由紀子

飛沫飛ぶたびに悲鳴や船遊び

節子

船溜り梅雨も終りの南風吹く

由紀子

「何度も来ているレトロロ地区だが、飽きることはない街である。昼食はレトロ地区のシンボリック建物の「国際友好記念図書館」の一階にある中華レストラン「大連あかしあ」。たっぷり食べた後、向かいの旧門司税関の建物に入る。昭和初期まで税関庁舎として使われていた所で、平成六年に北九州が復元した赤煉瓦造りの建物である。一階は吹き抜けのホールとなっていて、大きなソファが置かれている。座って体を休めて句作。税関で押収した偽ブランド品などを展示しているが、ギャラリ、休憩室、喫茶、展望室として使われている。建物内の煉瓦は、所々白くなっている所があり、実際に使われていた煉瓦なんだと判る。二階では写真展があり、美しい福岡、大分の景色や花、鳥の写真に癒される。句会場は門司港ホテルのレストラン。大皿に飾られたケーキと海峡を通り過ぎる船をガラス越しに見ながら句作。十句の句会。この門司港ホテルに最近売却話が浮上している。北九州市の第三セクター「門司港開発」の所有から投資会社への売却という話だが、まだ不透明らしい。北九州市が出資のホテルとは知らなかった。レトロロ地区の要のように建っているホテルなので、より良いホテルとなってもらいたい。

アロハ許されてフロント涼しげな

光子





【門司港レトロの施設】



第百六回吟行記

平成二十五年八月一日(木)

参加者 勝利 佳与子 節子 光子 由紀子

若松北海岸 (北九州市若松区・芦屋町)

酷暑の続く今年の夏。三十五度前後は当たりまえのこの頃である。健康上、毎年八月の吟行は、建物の中で長い時間過ごすように計画する。今回は響灘を見渡す若松北海岸を散策し、昼食を済ませてから、我が家でゆっくり作句してもらったことにした。

八月一日、気温三十四度、晴れ。十時半に若松北海岸の「とと市場」で、野田夫婦と合流する。光子さんは、車で節子さんを駅に迎え、十時に我



が家に到着。三人で集合場所に向う。若松北海岸は、我が家から車で十分。海近くにある「若松ゴルフ倶楽部」までの直線道路が開通し、海に行くのがさらに近くなった。

第三セクターなどでなく、民間会社の「とと市場」は生簀のある市場を中心に、海産物、地元の野菜、草木染め、食事処などが並び、海の見える丘陵地を生かして自然を満喫できる場所だが、冬には客が少ないだろうと思う。開店の頃は、平日でもランチの予約が取れないほどだった食事処「ととや」は閉鎖され、周りの草が伸びている。

車を駐車場に停めて、浜木綿の自生地まで歩く。すでに実になっているものや、白い花の先が茶色になっているものもあるが、遠目でみるとまだまだ美しい。浜辺まで下りていくと、家族連れが二組ほどおり、海水浴を楽しんでいる

浜木綿に紺碧の海真一文字

由紀子

浜木綿の丘に波音たえまなく

節子

泣き叫びあやされてゐる浮輪の子

節子

磯風に浜木綿匂ひ来ること

光子

岩礁を見下ろす山の草いきれ

光子

この辺りは、海水浴場となっている白砂の続く浜辺と、釣りや海藻採りの千畳敷の岩場のある美しい海岸線が弧をなしている。海は岩場や水深の



違いからか、所々青い色を少し違えてひろがっている。この海には、何度も来ているが、見飽きない景色である。

ここから車で五分ほどの芦屋町の柏原漁港に行く。小さな漁港だが、岸壁には烏賊釣り用の

の電球を吊り下げた魚船が所狭しと繋がれている。烏賊釣りを終えた漁港は人気なく波音と蟬の鳴く声ばかりである。堤防に釣りをしたらしい若い男性が二人何やら捌いている。聞けば「鱧」(キス)と言う。手馴れた様子で、小さな鱧を次々に捌いている。

トロ箱を積む廃車など浜晩夏

佳与子

雁木打ち上がり砕けて夏の潮

節子

突堤に屈みて鱧を捌きをり

由紀子

漁港の突端には二つの小山がある。手前は「堂山」、堤防を隔てて海の中にあるのが「洞山」である。どちらも「どうやま」と呼ばれている。木々



の生い茂った堂山の石段を上ると石塔群と延命地藏堂がある。壇ノ浦の合戦で、芦屋の「山鹿水軍」は平家に味方して敗れさり、その鎮魂のため建てられたらしい。諸説あるが・・・。

海にある洞山は、潮が満ちている時には渡れないが、干潮時には、ごつごつした磯伝いに歩いていくことができる。岩には海藻が張り付いているところがあるので、乾いた岩でなければ滑りそうで一歩一歩ゆっくり歩く。船虫がさつと逃げていく。

蝉しぐれ漁港にもある鎮守様

光子

烏賊釣のなにがし丸や船溜り

光子

夏潮や平家落人祀られて

由紀子

人気なき漁港真昼の蟬時雨

由紀子

歩き出す足に船虫湧き散れり

由紀子

扇状に逃げて船虫どっと散り

佳与子

船虫のくもの子散らすやうに逃げ

佳与子

水が引くやうに船虫無き行く手

節子

洞は落石の危険性があるので、茶黄色のセメントらしいもので補強されている。近づくほどに人工的で興ざめもするが、洞から見ると景色は、玄界灘の荒々しさに焦点が合わさって面白い。同じ海岸線にありながら、白砂に穏やかに打ち寄せる波もあれば、岩礁に打ち付け白い飛沫の波もある。そこが魅力の若松北海岸である。

蟬時雨岬の洞に満ち満ちて

勝利

玄海のこれも岩礁夏の潮

光子

岬一つ廻れば荒し夏の潮

光子

食事処は我が家の生活圏内の「うるちや」。夜は居酒屋になる掘りこた

つ式の食事処で、スイートと飲み物フリーなので、ランチ時は近所の主婦達がちよつと息抜きに寄る場所である。句作。
ランチタイムが終り、我が家へ向う。十句の句会。何の「おもてなし」はできないけれど、たつぷり時間はある。いつものように句評しあって楽しい時間を過ごす。帰りは光子さんに任せて解散。



【洞山】



【若松北海岸・夏井ヶ浜 & 芦屋・柏原漁港】



第百七回吟行記

平成二十五年九月六日(金)

参加者 勝利 佳与子 節子 光子 真理子 由紀子

皿倉山山頂(八幡東区)

暑というより酷暑は、まだまだ続きそうだ。暑さ疲れもピークになる頃なので、吟行地を涼しい皿倉山にする。

約七百メートルの山頂まで歩けば大変だが、車、ケーブルカー、スロープカーを使えば、誰でも楽に山頂からの景色を楽しむことができる。十一時ケーブルカー山麓駅に集合。家庭の事情で遅れて到着した私は、十三時に山頂レストランで合流。久々に全員参加の吟行となる。下界よりも涼しい



風に、皆元気で明るい。

ふうわりと蝶迷い出で女郎花 勝利

ケーブルにふるる高さに女郎花 佳与子

山頂に石の祠や昼の虫 佳与子

製鉄の工場の屋根秋の晴 節子

山道を隠す芒を掻き分けて 節子

ケーブルの運転台に秋団扇 節子

標識の杭古びたる芒原 光子

秋草の野の一隅に祠あり 光子

吾亦紅昨日の風に傾きをり 光子

雲の峰登らんとする山仰ぎ 由紀子

山頂の展望台から北九州の街を眺めたあと、電波塔周辺や国見岩まで行ったらしい。山頂からの景色は、いつ見ても気持ちよい。この辺りだけでも十分な吟行だが、この帆柱山系の見どころにもなっている「皇后杉」まで



歩くことを提案すると皆快諾してくれる。

スロープカーで山頂駅まで戻り、さっそくピジターセンター方向へ歩く。ピジターセンターの管理人に聞くと、「皇后杉」まで二十〜三十分はかかるという。一瞬句会の時間を考えたが、権現山方向の「皇后杉」まで、こういう時でないといふこともないので決行する。秋草の生い茂った野外音楽堂を通り過ぎると広場（皿倉平）に出る。左に行くと「菓草園」、右に行くと「皇后杉」。リュックを背負ったハイカーが一人、二人とそれぞれに歩いていく。この帆柱山系の山々は、縦走道がいくつか分かれて、河内貯水池や畑貯水池に下りることができる。

葉を鳴らす風の道あり山の秋

光子

秋草に埋もれ野外音楽堂

光子

昨日とは違ふ山河や野分あと

由紀子

蚊遣香さげて登山の客らしき

佳与子

山頂に残る秋草かがみ見る

佳与子

秋天へ羽根の破れし黒揚羽

勝利

「皇后杉」へは、整備された道の上の脇道を歩かねばならない。前日に雨が降ったせいもあって、径は湿っており、尚且つ山の斜面から清水のように流れ落ちている箇所もある。鬱蒼とした径を歩くと、頭上から鳥の声。鳥に詳しい節子さんは、「多分相思鳥だろう」と言いつつ、鳥の声に呼応にて鳴き声を真似る。するとまた鳥が鳴く。誰もいない薄暗い山の中で、何か心和む。

鳥寄せの口笛吹いて爽やかに

真理子

相思鳥しば鳴く山の秋澄みて

真理子

相思鳥鳴き交はす空秋の山

節子

口笛を吹けば答へる小鳥あて

節子



ようやく「皇后杉」に辿り着く。一本ではなく何本もある。正確には皇后杉林。高々と杉林が広がっている。その中の一際大きな老杉には、注連縄が掛けられている。北九州には神功皇后伝説が多く残されていて、こ



皿倉平まで戻りベンチに座り休憩。まだまだ葉は色づいていないが、赤い実をたくさん付けた木が目につく。名札には「ヤマボウシ」（食用）と書いている。我が家にも植えている木だが、食べたことはない。恐る恐る口にすると、柿のような甘みが口にひろがる。アケビ蔓やむかご蔓が木々に絡まっている。秋の山路は木の実の宝庫。ビジターセンターに戻る徑に、それらを見つげながら秋を満喫する。

の皿倉山も、神功皇后が切り立った崖の上から夕暮れまで国々を眺め、下山の際に「更に暮れたり」と言ったことから、更暮山・更暗山と転じ、更倉山になったとされ、また朝鮮出兵の際に、船の帆柱をこの山から切り出したことから、この下の山を帆柱山と呼ぶようになったと伝えられている。この故事からこれらの杉の巨木も皇后杉と呼ばれているが、実際には福岡藩による造林で、樹齢二百〜四百年らしい。

秋冷の皇后杉といふが立つ

真理子

近づけば木の上からも虫の声

勝利



ビジターセンターにて十句の句会。帆柱自然公園愛護会が運営しているので、センターは登山者にとって情報を得たり、休憩や会合など自由に入りでき、鳥や花の説明をしてもらえる便利な場所だ。十六時三十分閉館の為、句会途中でケーブル駅に急ぐ。下山して山麓駅内のテーブル席で句会を続ける。とりあえず互選を終えるが、得点句の講評途中に、最終のシャトルバスが発発しそうだったので、あわてて解散。なにがどうしたか分らないままの解散となったが、秋の山に句を作りあげて満足の日だったことは確かだ。

見るたびに姿を変えて秋の雲

節子

しばらくは花を離れず秋の蝶

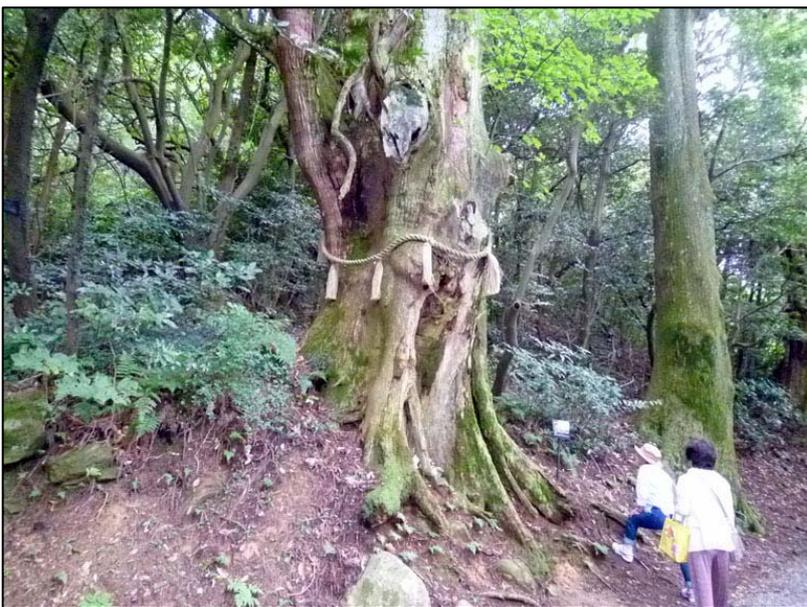
勝利

聞こえないふりしてむかご蔓を引く

由紀子

開け放つビジターセンター蟬時雨

佳与子



【皿倉山頂】

【皇后杉】

第百八回吟行記

平成二十五年十月四日(金)～五日(土)

参加者 勝利 佳与子 節子 光子 真理子 由紀子

船小屋温泉・岩戸山古墳(筑後市・八女市)

八月に鵜飼吟行の話がだが、全員の日程が合わず、鵜飼期間も終ってしまった。九月吟行日に、ふと真理子さんが「船小屋辺りがよかったよ」と言った言葉に皆興味を持ち、一泊二日の吟行が決まった。

十月四日晴れ。今回も家庭の事情で遅れての参加となる。博多から新幹線に乗り換え、筑後船小屋駅で下りる。九州新幹線「つばめ」で博多から三駅目。博多く新鳥栖く久留米の次に「筑後船小屋」があり、次の駅が「新



大牟田」である。同じ福岡県でも、知人や親戚もない筑後までは行くことがないので、是非参加したい思いで、一人皆のいる場所へと急ぐ。

筑後船小屋の新幹線の駅舎は、在来線の駅舎と並んで建設され、どちらも真新しい。「筑後広域公園」内という駅の周辺は、ビルなど高い建物はなく、芝生や大きなからくり時計や芸文館などもあり、田舎に突然立派すぎる駅舎ができたという印象。乗降者数が少なく駅舎のみ目立つ。からくり時計は、国指定天然記念物「新船小屋のクスノキ林」の大樹をイメージしたもので、毎時0時になると演奏が始まり、木の枝葉が大きく広がり、この地域の名物が次々に登場するという。

秋晴のからくり時計温泉の駅

佳与子

タクシーにて、皆が昼食をとっている温泉宿「樋口軒」へ向う。歩けば遠いが、車だとすぐという距離にある。到着すると、ちょうど食事が終り、デザートを食べている。一息ついたところで泊まる部屋に荷物を運び、初めての船小屋温泉郷の吟行に出かける。

矢部川沿いの船小屋温泉は、稀少な含鉄高濃度炭酸泉で、江戸時代末期に発見され、湯治場として栄えている。レトロな「船小屋鉱泉場」の建物に入ると、鉄分の黄土色した鉱泉が誰でも飲めるようになっていて、地元





の人らしい男性がペットボトルに鉱泉を入れている。柄杓が置いているので一口飲んでみると、体には良さそうだが苦い。五高に赴任した夏目漱石が、結婚したばかりの妻鏡子とこの温泉郷に立ち寄ったらしく、句碑が枝垂れ桜の下にひっそり立っている。句碑の「ひやひやと雲が来るなり温泉の二階」の句は、近くの「大和屋」という古宿で詠んだ句らしい。

薬効のある鉱泉やいわし雲

由紀子

船小屋といふは湯の町秋うたた

由紀子

漱石の曾遊の温泉宿蘆の花

真理子

「足を伸ばして広域公園内の芝生広場まで歩く。ここには川の駅「恋ぼたる」というしゃれた名前の温泉施設や物産館、野外ステージなどあり、駐車場に多くの車が止まり、家族連れで賑わっている。

近くの矢部川

に架かっている

船小屋大橋（赤

橋）辺りから川原

に下り、川に沿っ

て宿「樋口軒」ま

で歩く。川は穏や

かに流れている

が、昨年の夏は大

雨で氾濫し、沈下

橋の木橋、通称「ガタガタ橋」まで壊し、その残骸が土手に置かれている。

対岸に見える中洲「中ノ島公園」のクスノキの巨木群の幹は、地面から一

〜二メートル白く皮が剥げた状態のままになっている。濁流の激しさを物

語っている。



なめらかに堰越えて落ち秋の水

由紀子

秋草に橋の残骸干されあり

由紀子

いわし雲水禍の傷の残る木々

由紀子

ハヤの子の群れてゆるやか秋の水

光子

流失の木橋揚げあり秋の風

光子

対岸の中の島より小鳥くる

真理子

ひっそりと武装石人薄紅葉

節子

水害の跡まだ木々に天高し

真理子

コスモスを庭に育てて野良着干す

光子



十六時より宿にて十句の句会。夕食は真理子さんが吟行途中に買ってくれた名物「ハヤの甘露煮」も頂きながら、美味しさに満足。味よし温泉よしの宿にて一日目を終える。

二日目の朝九時三十分 真理子さん手配のジャンボタクシー貸切で廻る。どこも初めての場所ばかりで、どこをどのように行ったのか、どのように書いたらよいのか困るほど見所の多い吟行となった。宿〳恋木神社〳山樞窩〳石人山古墳〳岩戸山古墳〳八女茶畑〳食事処(句会)〳羽犬塚駅(解散)の順で廻ったと思う。

レプリカの石人像へばった飛び

佳与子

石人の守れる墳墓屋の虫

真理子

木の実降る道を外れて遺跡へと

佳与子

木の実降る磐井の墓の石馬にも

真理子

石人の人形が原秋風に

節子

庭先につづく茶の畑秋しぐれ

真理子

せわしなく藁屋根歩くちがらす

節子

茶山とは丘なだらかに秋時雨

真理子

一泊二日の吟行は、内容の濃い有意義なものでした。二日目の雨の吟行は句と写真で思い出して下さいね。



【八女茶畑】



【句会場・食事処】



【漱石の句碑と宿】

船小屋温泉の 始まりと歴史

船小屋の地名は、元禄2年(1689) 瀬川工事用石船五艘の収納小屋が設けられ、当時、この小屋を「石船小屋」と称しており、後に「船小屋」と呼ばれるようになり、後に「船小屋」と呼ばれるようになった。

船小屋温泉は文政7年(1824)に井戸を掘り、薬泉のわかし湯として利用したのが始まりとされ、明治19年の成分分析では多量の炭酸が溶け込んだ日本有数の含鉄炭酸泉であることが示されました。

その後、鉱泉を生かした船小屋の開発事業に着手し、明治22年、矢部川と松木川が合流する西南角に最初の浴場施設が完成しました。

明治37~38年の日露戦争当時は、陸軍指定の転地療養所として、多くの戦傷者を迎え、昭和初期にかけては、飲食店、遊戯場、土産物店等が道筋を埋め、県南唯一の温泉地として栄えていきました。

昔の船小屋の風景

矢部川

筑後市、みやま市の市境を流れる矢部川は、矢部村の三国山に源を発し、いくつかの支流を集め、有明海に注いでいます。

春には菜の花に彩られ、大楠の緑、船小屋温泉大橋の赤とのコントラストを楽しむことができます。

明治29年には、夏目漱石も来遊し、『ひやひやと 雲が来るなり 温泉の二階』の句を詠んだとされ、鉱泉場の北側には、句碑が建てられています。

昭和6年に秩父宮殿下、昭和24年には昭和天皇もご宿泊になりました。

(参考資料…筑後市史)



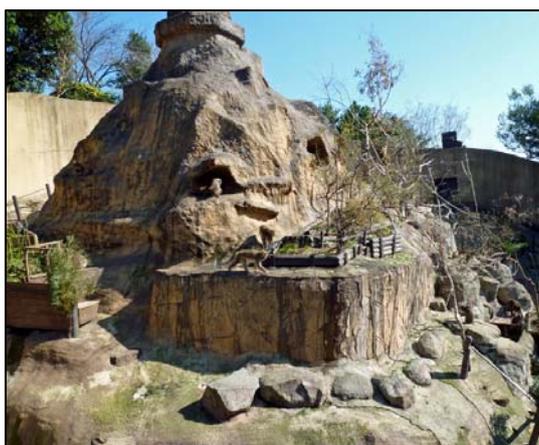
【恋の木神社】

第百九回吟行記

平成二十五年十一月十四日(木)

参加者 勝利 佳与子 節子 真理子 光子 由紀子

到津の森公園 (北九州市小倉北区)



雨の予報だった十一月十四日は、朝から晴れて小春日和となった。十一時「到津の森公園」玄関で集合。今回も皆に遅れての参加となり、西小倉よりタクシーで公園の玄関まで行く。皆は、入口近くの猿山やロバ、山羊などの「ふれあい動物園」を眺め、作句をしている。

小春日の動物園やゲート開き

節子

ストロブの前に寄り添ふ猿に二匹

節子

山茶花の花を潜りて猿山へ

節子

猿山の猿そこ此処に日向ぼこ

節子

掴みたる芋の蔓むしる猿の子

真理子

猿山の湯つぼからつぼ小六月

真理子

ロバの耳やっぱり太き花八手

真理子

両手足だらりと猿の日向ぼこ

光子

猿渡る猿秋天に手を伸ばし

佳与子

代替りしたるボス猿園小春

佳与子

合流できるのを待っていてくれたようで有難い。十二時前で、これから象、ライオンなど園内の動物たちを見て廻るとのこと。園内放送で、チンパンジーの餌やりの見学案内しているので、ゆっくり周りのエリマキキツネザルなどの檻を覗きながら、チンパンジーの部屋の方へ行く。少し紅葉が始まっている園内は、紅



葉より石落の花が盛りで、檻の中にも道々にも黄色の明るさが目立っている。

モノトーンとなりし景色に石落の花

勝利

咲乱れるとは云わざり石落の花

勝利

どこにでも石落の花咲き遊園地

佳与子

つわぶきの花をぐるりと象の檻

節子

はたはたと動いて象の耳小春

由紀子

花石落の影に虎居る寝ておりぬ

由紀子

虎のふと首を上げたる落葉かな

真理子

虎は檻の奥で座り、象はシッポや耳を動かしながらのつそり歩き、時折糞尿をしている。ここでは象に餌を買って自分で食べさせることができる。小さい子どもがお母さんと一緒に餌やりしているのは微笑ましい。そろそろチンパンジーの餌やりの時間。すでに親子連れや若いカップルたちも集まっている。透明のアクリル板の向うに五く六匹いたと思う。女性の飼育員が餌かごを持って中に入ってくると、チンパンジーたちはじっと見ている。飼育員は薄く切ったバナナやりんごをアクリル板の上に下に貼りつけて行く。みかんは食べやすいように切って木の枝の間にばら撒い



ている。岩の天辺の小さな穴には「はちみつ」を流し込んである。チンパンジーたちは、手の届く所の果物を食べたり、手に持ちながら反対の手で大きくジャンプして上の果物を次々にゲットしていく。アクリル板の餌は全てなくなり、餌を握りしめて四方に散らばり食べ、はちみつを見つけたチンパンジーは、木の枝でほじくるようにして美味しそうに口に入れていく。なかなか枝の使い方が上手い。

宙吊りのリングに猿の大ジャンプ

佳与子

こちらも十二時を過ぎ、お腹もすいてきたので、レストラン前のテーブルに陣取ってそれぞれに持ってきたおにぎりや弁当を食べる。風もない穏



やかな日中で、外での弁当が格別に美味しい。
 近くの「こども自動車」や「サイクルモノレール」が動き、午前中は動いて
 いなかった観覧車も動いている。芝生広場に幼稚園児の集団の姿はなかつ
 たが、広場は思いっきり走り回れる場所で、遠足にもってこいの園である。
 この到津の森公園は木が多く、動物たちは出来るだけ自然なかたちで飼育
 されている。目の前のキリンは父親キリンで、少し離れた柵の中に母親キ
 リンと子どもキリンが餌の木の葉を食べている。その奥にシマウマの姿も
 見える。

小春日や麒麟の長き睫毛にも
 頬寄するキリンの夫婦薄紅葉

勝利
 由紀子

獣園の白ひにも慣れ冬ぬくし
 やうやくに午後晴れし冬観覧車

由紀子
 光子

最近生まれたライオンの子を
 見ることができるといので、
 檻の前に行くと、ライオンの母
 親が座り心地のよさそうな岩の
 上に座り、こちらをじっとみて
 いる。動じることのない姿はさ
 すがだ。子どもライオンは六ヶ
 月目で三十キロ。名前は「ちゃ
 ちゃ丸」飼育員は、こちらが
 質問をすれば丁寧に答えてくれ
 る。愛情いっぱい育てたライ
 オンの子を見る目がやさしい。
 母親ライオンの座っている岩に
 は、暖房用ヒーターが施されている説明にも納得。気持ちよさそうな目を
 している。



小六月赤子ライオン足太く
 お披露目の子供ライオン小六月

勝利
 佳与子

ライオンの岩暖房も仕込まれて 佳与子

キリンの子ライオンの子も紅葉中 光子

ライオンの母は動かさず冬ぬくし 真理子



色彩豊かなインコなどを見ながら、近くで
吠えているフクロテナガザルの檻まで行
く。この猿が泣かなかつたらこの園は静か
だろうと思うほど、その声は園中に響くが、
吠え方に愛嬌があるので、つい泣かせてし
まいたくなる。

吠猿を鳴かせ獣園小六月 由紀子

輪唱のごとく鳴く猿園小春 由紀子

ふり向きし猿の目ひかる冬の檻 由紀子

どの檻の中にも冬日さしてをり 由紀子

冬の日の差し始めた猿の檻 節子

池の傍にある長椅子に座って句作。南ゲートの貸切バス駐車場近くの「子どもホール」にて十句の句会。

閉門の時間が近づいたので、普通車駐車場の北ゲートへ向う。途中のバー
ドケージに鴛鴦を見ながら夕暮れの近くなった園を後にした。

終業を待つ職員ら落葉掃く 節子

十ばかりフラミンゴみる薄紅葉 節子

賑やかに鴛鴦池の飛沫上げ 節子

閉門の迫りし園の落葉掃く 佳与子

閉門を急ぎながらに鴛鴦見たく 由紀子





【到津の森公園内風景と動物】

第一百十回 吟行記

平成二十五年十二月

森鷗外と小倉（北九州市小倉北区）

十二月の忘年吟行句会には家庭の事情で参加できなかった。皆は小倉の「森鷗外旧居」を吟行したようなので、小倉時代の鷗外について調べ、それを今月の吟行記の代わりとする。



森鷗外は明治三十二年六月から明治三十五年三月までの二年九ヶ月小倉に住んだ。その住居が小倉の繁華街、鍛冶町に残っている。旧居前の道は、車がやつと離合できるほどの狭い道で、飲み屋が途切れた所に、垣根の奥に木造瓦ぶき屋根の平屋建ての当時のままの家が、ひっそり建っている。屋敷の庭には小説「鶏」にでてくる百日紅や夾竹桃が植えられている。

鷗外は第十二師団の軍医部長として小倉にやってきた。東京大学医学部を卒業して陸軍軍医となった彼は、四年間のドイツ留学後、東京で活躍していたところの突然の小倉転勤だったらしい。明らかに左遷で、

【夕風に袂すずしき常盤橋上りの汽



車はなほ妬かりき】



と悔しさを歌にして残している。

左遷の理由として挙げられるのが、①ドイツ留学のとき、上司の意向にそわず、独自の行動をとった。②「舞姫」のモデルとなったドイツ女性が、彼を追って来日して物議をかもした。③海軍中将男爵の長女と結婚したが、二年もたず離婚している。④陸軍医学部の先輩を医学雑誌で批判した。⑤「小説」を次々に発表して文名があがった。特に⑤は、軍の要職にいる者の行為ではないと響燈（ひんしゆく）をかって、これが決め手となって左遷となったらしい。鷗外三十七歳の時である。

明治二十三年二十八歳の時に、ベルリンを舞台にした「舞姫」、続いてミュンヘンの「うたかたの記」、ドレスデンの「文づかひ」のドイツ留学を下地にした「ヨーロッパ三部作」を発表して、一躍文壇の寵児となっている。その彼が、小倉着任後、小説は書かず翻訳や評論を執筆するだけで、発表も福岡日日新聞（現・西日本新聞）だけで、目立たない活動に終始している。そのため鷗外の小倉時代は「遠流」「沈潜」の時代と言われているが、この後の彼の活躍をみると、小倉時代は飛躍のための充電期間の好機だったと言える。



実際、軍医部長としての重要な任務である徴兵検査の立会いなどで、各地を訪ねるたびに、先賢の墓に参り、史跡や資料を見聞して、九州の歴史に関心を寄せ、福岡の「粟山大膳」熊本では「阿部一族」の作品が後に発表されている。また、鵬外は小倉で安国寺の住職と親しくなり、禅宗の唯識論の講義を受け、代わりにドイツ語を教えている。その頃住居を鍛冶町から京町に移して、毎日のように行き来があったようだ。小倉時代から「圭角が取れ肝が練れてきた」と言われる一因になっている。



頼まれて、「我をして九州の富人たらしめば」を書き、「坑業家」たちに大きな警鐘を鳴らしている。感銘をうけた炭鉱王の安川敬一郎、松本健二郎父子は、明治専門学校（現・九州工業大学）を設立し、九州から多くの技術者を排出している。「我をして・・・」の文の中に「利他の志」「自利の願い」という言葉がある。利他は労働者の財産形成を助け、社会保障制度を設け、衛生を普及することで、



心ある人はその価値を認めるが、並の金持ちに説いても聞き入れてくれない。自利は美衣を身につけ、酒食にふけることもできる。官能だけ満足させておくとも身体を損なう。それで富んでいる人の「自利の願い」に残されているのは、学術と学問だという。自分が金持ちなら、官能を満足させることに金を使わないでコレクションを考える。価値のあるものを収集して、公衆の視聴に供する。また九州は歴史の宝庫だから、研究所を作って学者を集め、九州の歴史研究に貢献すると・・・自分が富人であれば、こうすると書かれている。

このようなことを福岡日日新聞に書いたのには、鵬外が小倉着任後遭遇したことから、書かずにはおれなかったのだろう。当時一部の炭鉱王の目にあまる非常識ぶりや無法ぶりが話題になり、鵬外自身も直方駅で人力車に乗ろうとして車夫に相手にしてもらえなく、雨の中を歩いて仕事に出かけるという経験をしたようだ。肩書は師団の軍医部長だが、規定料金しか



払わない軍人より、お札をばらまく炭鉱王の方が車夫にとつて上客なのである。結果的には、「我をして・」の寄稿文は、多くの人に感銘を与え、人を動かしている。

小倉勤務の後、待望の第一師団軍医部長の辞令をもらって、明治三十五年三月小倉を発つことになるが、その送別会での挨拶が、有名な「洋学の盛衰を論ず」である。その間「即興詩人」の翻訳を完成させ、八幡製鉄所の開所式に参列し、大審院判事の長女・荒木志げと再婚するなど、公的にも私的にもだんだん充実した時間を持つようになる。この五年後、陸軍軍医総監に昇進し、翌年文学博士にもなり、団子坂に構えた居宅「観潮楼」にて、名作を次々に生み出している。



覗き見る鴉外旧居冬の雨

佳与子

時雨傘傾け路地にすれ違ふ

佳与子

鴉外の旧居冬雨降りはじめ

光子



地藏堂探しあぐみし日短

光子

鴉外の橋に電飾年の暮

真理子

土運船ゆっくり動く冬の川

真理子

懐手して買い物について行き

勝利

欠伸して凹むマスクを見てしまひ

勝利

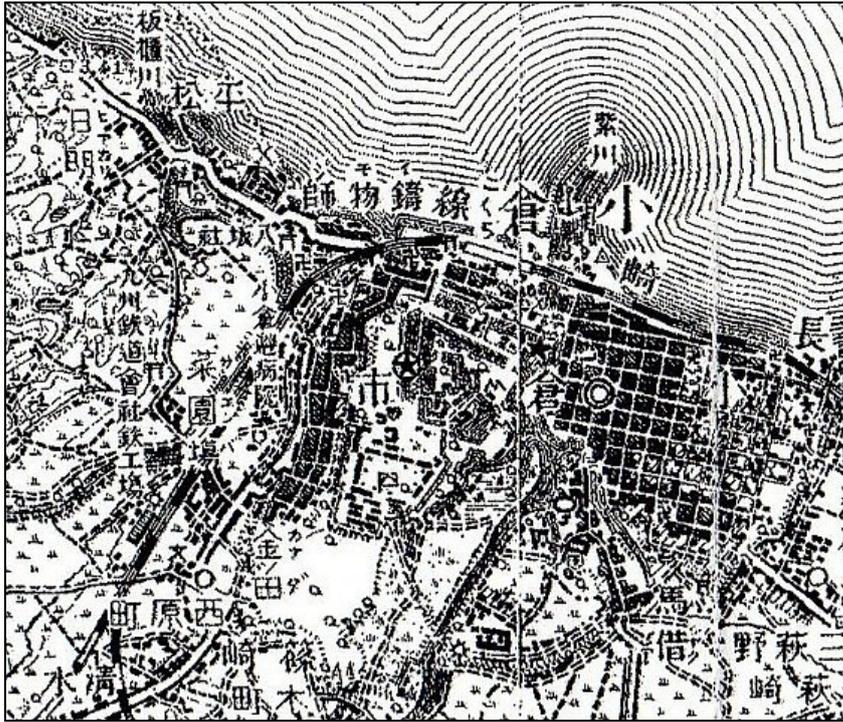
救急車来てすれ違ふ路地師走

節子

大川に腰まで浸かり川普請

節子





【旧小倉市の地図】



【紫川にかかる「鷗外橋」と句碑】



自
選
句

(五十) 五十五

自選句 五十

「平成二十四年十二月投句」より

着膨れてボックスシートの二人かな
暖房に慣れて寒しや降車駅
狸見た末の子夕餉の主人公

節子



神輿庫のあたり簾目冬ざれて
なきがらのここにも冬のきりぎりす
子狸に夜毎の庭のレストラン

真理子

チェーンソーの音ふところに山眠る
酔ひどれの男通りし狸かな
綿虫は子供に追はれ風に乗り

勝利

小春日の野良猫我を離れずに
橋下に猫の住処や小六月
十字路の多きこの道石路の花

佳与子

訪へば聞きしにまさる紅葉寺
野火止の水あり沈む冬紅葉
極月の銀座和光に待ち合す

由紀子

磐梯の左飯豊山眠る
ひんやりとして来し車窓見れば雪
ほたる棲む川にも銀杏散り込みて

光子

「平成二十五年一月投句」より

目貼してお手玉あそび豆の音
挨拶を交はす山道冬いちご
冬ぬくし四人の歩調揃ひをり

光子

歩きあることの楽しく落葉道
軽々と紅葉落葉の袋寄せ
山道に行き逢ふ人や冬ぬくし

節子

塵と見えをりしが百合の返り花
冬の星屑を落として音もなく
気働き行き届く娘や冬日和

真理子

お小言をゆつくり啗んで温め酒
独り住む母や目貼にガムテープ
故郷の迎えは厚く帰り花

勝利

小春日や禰宜と緋鯉の話など
雨の日の車庫に並べて菊の鉢
忍び寄る鷺をかわして冬の蝶

佳与子

倒木の割れ目定かに秋の風
ジョギングの人下り来たる紅葉坂
貼り終えし障子明りに墨を磨る

由紀子



自選句 五十一

「平成二十五年二月投句」より

一年の早きに追はれ豆を撒く
でこぼこの泥にでこぼこ蟻の道
駅弁や色とりどりに春めきて

提灯も河豚や馬関のひな祭
ゆるやかな流れありけり蜷の道
豆をまく女に彼女帽子振る

追儺会の舞台に迫る人出かな
舞台より我還暦の豆を撒く
雅叙園のその季節なる雛の壇

春塵を払ふ一日また埃
掛声のとぶ六代目豆を撒く
窓枠に頬杖ついてみてのどか

日曜の節分祭の人出かな
もうもうと煙る護摩堂春浅し
我もこの善女の一人豆を撒く

護摩堂を出て深呼吸梅ふゝむ
五重塔花三極に静もりぬ
穏やかに老ゆること捨て春立つ日



勝利

佳与子

由紀子

光子

節子

真理子

「平成二十五年三月投句」より

アーケード一直線につばくらめ
鳥寄せの口笛ならん耕せる
去年の巢を補強するなどせし燕

耶蘇墓の崩れしところ土筆生ふ
春耕の土の匂ひも筑紫かな
着陸機つちふる街に人を吐く

うららかなこの一日を遊ぶべく
揚雲雀ゆく手に昼の月かかり
歌ふのは鳥と鯨と人の春

土筆摘む誰も知らない野のここら
生きてゐるものの音して春の池
初蝶の光となりて飛んでをり

発掘の穴そこここに春の水
八重桜つぼみ匂へる雨上がり
夕燕雨空かすめ行きにけり

箱根路や待合室に春暖
牡丹の芽凍たる気性はや見せて
どの風も東風と詠みたき都府楼跡



佳与子

由紀子

光子

節子

真理子

勝利

自選句 五十二

「平成二十五年四月投句」より

人波の先に隅田の花吹雪
散る花に眠りたる児を抱き帰る
花吹雪くみすゞの碧き海へ吹く

由紀子



畑日記真白きままに別れ霜
奥宮へ八重の桜の上り坂
春深し花咲く木々に囲まれて

光子

鯉幟風弱まれば寄り添ひて
西海に渦巻き始む春の潮
大橋の足元に透け春の潮

節子

首振りて厩出し馬ののどかなる
紅帯びしかなめ若葉や巫女ふたり
ゆがみある玻璃春光を膨らませ

真理子

山桜こそ好しとする齡なり
芽柳に黒点じたる鴉二羽
花筵小さき靴も揃へられ

勝利

鶯や息切れしそうにも鳴いて
掃き寄せて小さき嵩や花の屑
なでてみる馬の鼻筋牧のどか

佳与子

「平成二十五年五月投句」より

若葉雨しなふ枝先くぐりゆく
ふっくらと雨の築山苔の花
株の荷を解いて落着く更衣

光子



丈低き文字摺り花を振り初め
車窓より見る大阪の駅薄暑
カーネーション何も言わずに渡されし

節子

あをあをと匂ふ豆飯供えけり
火照り顔して戻りたる夏蕨
踏切に参道短か蟬丸忌

真理子

夜半に去る名残摘み来し月見草
女生徒の腕まぶしくて更衣
大輪の薔薇に照らされディナーかな

勝利

郭公や男時折背伸びして
ががんぼをエレベータの閉ちこめて
尖りつつ薔薇の花びら朽ちにけり

佳与子

臨書せし歌の幾首や桐の花
踏み入れば異国めく湖青芭蕉
天守閣からは陽炎ふ阿蘇五岳

由紀子

自選句 五十三

「平成二十五年六月投句」より

岩がらみならん白花大夏木
的までの青芝眩し弓道場
軽鬼の子を探しながらの池巡り

節子



カルテラに阿蘇の赤牛干草と
ソフトクリーム商ふ干草サイロそば
流れ行く水二筋や鳩浮菜

真理子

手の指をこじ開け光る螢かな
風ならんかなた揺れるる花菖蒲
ひたすらに点対称や額の花

勝利

抱卵の親鳥浮菜離れずに
弦の音低く梅雨の矢放たれり
青芝の先の的へと弓を射る

佳与子

薔薇咲くや琥珀の中の蟻と蠅
この山に軍馬の塚や木下闇
ティーカップ手に洋館の薔薇の風

由紀子

干草の山の連なり阿蘇の牧
矢を放つ音のみ聞こえ夏木立
サルビアで彩る市制五十年

光子

「平成二十五年七月投句」より

脱ぐ途中なる蝉殻をとどめ果て
波音に重ねキャンプの子等の歌
流れ藻のまだ見えてをり夏の川

真理子

座るのに戸惑うほどの草いきれ
真すぐに宿の廊下を鬼やんま
闇の森吾を凝視する額の花

勝利

潮風のさらふ夏帽胸に抱き
いと小さきあぶくをひとつ目高かな
薫の香の少し残れる茅の輪かな

佳与子

南風吹く海峡に水脈乱れをり
海峡のうねり潮に梅雨の船
雲の峰門司港駅の零哩

由紀子

キャンプの子遊び疲れて星の下
梅雨湿り機械油の匂ひして
遊船を一人切り盛り二十歳なる

光子

雪溪の雪をコップにジュースかけ
丁寧な機関車磨く梅雨仕事
機上より入道雲の海原を

節子



自選句 五十四

「平成二十五年八月投句」より

人中で踊るわが娘は大人びて
特攻の遺書読み解く生御霊
燃え盛る風を恐るる門火かな

勝利



荷を放り投げて踊の輪の中へ
足先に馴染む鼻緒や盆踊
扇状に逃げて船虫どつと散り

佳与子

国東に六郷の嶺々稻の花
夕さりの風に木槿の紅を閉づ
踊り子のあひの手揃ふ口説唄

由紀子

子供らは九時で解散盆踊
炎天に屋号書かれし板洗ふ
軍歴のメモが遺品に法師蟬

光子

雁木打ち付けて真白き夏の潮
炎天に雀が一羽瘦せてをり
パソコンに鳴いて微かや鉦叩

節子

鵲の野太き声の今頭上
島人にまじり踊りの輪を広げ
天空に蜘蛛蟪蛄を張り付けて

真理子

「平成二十五年九月投句」より

夜廻りの拍子木通る良夜かな
秋の日のスポットライト庭の木に
たしかめる防災グッズ震災忌

佳与子



相思鳥鳴き交ふ山の女郎花
連峰の水の育てし稲田かな
ビルの影ビルに映して秋の晴

由紀子

春秋の震災忌ともなりぬべく
秋草の野の一隅に祠あり
口笛に返す山鳥葛の花

光子

それぞれ違ふ秋雲窓ガラス
相思鳥鳴き交はす空秋の山
口笛を吹けば答へる小鳥あて

節子

仮寝する鷹に一夜の山暮れて
しみじみと残りて高き鷹の空
鳥寄せの口笛吹いて爽やかに

真理子

野に色を配り初めしや秋の蝶
しばらくは花を離れず秋の蝶
秋天へ羽根の破れし黒揚羽

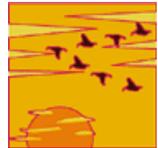
勝利

自選句 五十五

「平成二十五年十月投句」より

踏切の音聞こえくる秋の海
船小屋といふは湯の町秋うたた
八女茶畑すつぱりつつむ秋の雨

由紀子



鉱泉の湧く音しきり後の月
流れ来て頭上にほどけ鷹柱
朝霧や夕べはここで星を見て

光子

薫茸きの屋根に番ひのちがらす
石人の人形が原秋風に
乳母車からも応援運動会

節子

庭先につづく茶の畑秋しぐれ
木の実降る磐井の墓の石馬にも
綿雲の間より見え後の月

真理子

全身を曝けて鴟の高音かな
平家琵琶の撥に映りし後の月
錦秋の空気切り裂くりニアかな

勝利

直筆の句碑と伝はり秋の風
蘭草に蝶の飛びかふ日和かな
山ぶどう口に放れば野の香

佳与子

「平成二十五年十一月投句」より

杞陽忌や名残の夕べ虹立ちて
キリンの子ライオンの子も紅葉中
抱かれるる子の足袋白し七五三

光子



冬の日の差し始めたる猿の檻
ストーブの前に寄り添ふ猿二匹
小春日の動物園やゲート開き

節子

猿山の湯つぼからつぼ小六月
鳥籠の小春の一日暮れんとす
そのほとり遺跡の蕎麦も刈り終り

真理子

青空の熟柿を仰ぐ喉仏
霜枯れしカンナの花の気骨かな
小六月赤子ライオン足太く

勝利

磴上る子や袴着の裾つまみ
空港に商ふ野菜小六月
但馬今時雨るる頃か杞陽の忌

佳与子

はたはたと動いて象の耳小春
ふり向きし猿の目ひかる冬の檻
花石踏の影に虎居る寝ておりぬ

由紀子

あとがき

「響風」九号は、八号同様、五月の連休期間中での発行となりました。

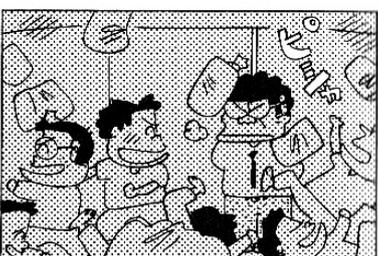
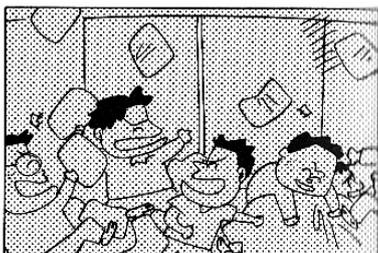
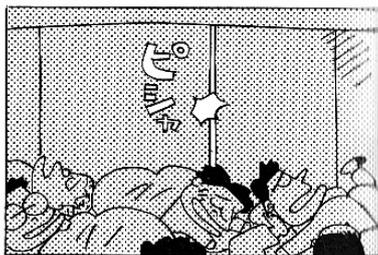
毎月のホームページに掲載した一年分の編集、印刷、製本が近づくと、発行人は一年を総括する「まえがき」を、編集担当は出る幕はこころしか無いと「あとがき」のストーリーを練り、冊子の体裁を整えるのに懸命となります。出番である「あとがき」作成に当たっては、ネタ探しに前年の「流行語大賞」「サラリーマン川柳」等の世相や社会動向の資料を慌ててあさってみますが、落とし処が見つからず、時間だけが過ぎてゆきます。

こうした中、編集担当は現役サラリーマンとして、仕事・上司と部下・通勤・アフター5・パソコン・スマホ・夫婦・家庭生活・親子等に対する観察力と、半ばブラックジョークとも取れる切り口鮮やかな十七文字の「サラリーマン川柳」を読み返し、ストーリー作りの逼迫感を忘れ、思わず一人で噴き出したりすることも少なくありません。

十七文字で、心情を詠み切る俳句の格調には及びませんが、編集担当の好みである漫画の中でも、一コマ・四コマ漫画の鋭い風刺や「落ち」の切れ味・おもしろさは捨てたものではなく、今回の編集後記のメとして、四コマ漫画の達人「いしいひさいち」作品の中から編集担当のお気に入りをお届けします。

【修学旅行】

1661



【1996年朝日新聞掲載
「となりの山田くん」より】

ホームページ・編集担当



響 風—Hibiki Winds—

あしや句会 第9号

平成26年5月発行

発行人：江本 由紀子